

## 研究ノート

# MSM (Men who have sex with men) に割り当てられるトランスジェンダーを 対象とする HIV/AIDS 予防啓発に向けた一考察

—ハッテン場利用経験のある女装者 2 名の事例から—

宮田りりい<sup>1)</sup>, 塩野 徳史<sup>2)</sup>, 金子 典代<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 公益財団法人エイズ予防財団, <sup>2)</sup> 大阪青山大学健康科学部看護学科, <sup>3)</sup> 名古屋市立大学看護学部

**目的:** MSM に割り当てられる女装者を調査の対象に, 性別越境を伴う性行動や HIV 感染症に対する意識について明らかにする。その上で, 従来の介入の限界や, 当該集団を対象とする有効な介入手法の確立に資する知見を示す。

**方法:** 分析のための方法論として, ライフヒストリーを採用する。調査対象者の選定にあたっては, MSM のためのコミュニティセンターを運営する MASH 大阪と協働した。インタビュー方法は, 半構造化面接法を採用した。

**結果:** 第 1 に, 調査対象者たちは, 性別越境を伴って主な性行為相手が変化していただけでなく, 性行為相手と出会う場も変化していた。第 2 に, 調査対象者たちは, 活発な性行動を取ったにもかかわらず, HIV 検査を身近なものとして意識していなかった。加えて, HIV 感染症に対する身近なものとしての意識は, ゲイ向け商業施設との関わりや, 自分をゲイ男性と同等するか否かの影響を受けている可能性があった。

**考察:** 調査対象者たちは, 従来の介入から周縁化され, ハイリスクな状況に置かれている。今後は, 従来の介入と連携するかたちで, 活発な性行動をとる女装者たちに向けた HIV/AIDS 予防啓発の取り組みを進めていくことが求められる。

**キーワード:** MSM (Men who have sex with men), トランスジェンダー, HIV/AIDS 予防啓発

日本エイズ学会誌 23: 18-25, 2021

## 序 文

### 1. 背 景

2010年代に入り, 海外では, トランスジェンダー<sup>註1)</sup>を対象とする HIV/AIDS 予防啓発の重要性がよりいっそう注目されるようになっていく。2013年には, 医学雑誌『LANCET』にトランス女性 (MtF) を対象とした調査研究にもとづく論文が発表され, 当該集団は生殖可能年齢の全成人に比べ 49 倍 HIV に感染しやすいと結論づけられた<sup>1)</sup>。2014年には, WHO が発表したエイズ対策のガイドラインにおいて, 対策の鍵となる人口層として初めてトランスジェンダーの人々が含まれ, その後具体的な対策に向けた政策概要も発表された<sup>2,3)</sup>。

ひるがえって日本では, 「後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針」(以下, エイズ予防指針) の中でトランスジェンダーについての記載がないなど, 当該集団を対象とする HIV/AIDS 予防啓発の重要性がほとんど注目されないままとなっている。

以下では, トランスジェンダーのセクシュアルヘルスに

関連する, GID (性同一性障害) 支援と MSM (Men who have sex with men) 対象のエイズ対策という 2 つの観点から, 日本の現状をより具体的に整理していく。

#### 1-1. GID (性同一性障害) 支援

日本は, 海外と比べて特異なほど, 性同一性障害概念が好意的に用いられている国だと指摘されている<sup>4)</sup>。国内におけるトランスジェンダーに係る社会問題化は, これまでこの医学概念にもとづいて展開されることが主流となってきた。たとえば, 性同一性障害概念にもとづき, 「心身の性」<sup>註2)</sup>の不一致から生じる苦しみの軽減や, QOL の向上, 自殺予防などが社会問題化された結果, 厚生省 (当時) も認める公的なかたちでの性転換手術の実施や, 戸籍上の性別変更のための法律制定, 文部科学省による教育における当事者支援の推進などが実現している。

他方, 主流となってきた社会問題化に比べて, トランスジェンダーに対する HIV/AIDS 予防啓発については, 当該集団に係る国内最大規模の学会組織である GID (性同一性障害) 学会においてさえ, ほとんど重要視されてこなかった。

#### 1-2. MSM 対象のエイズ対策

2018 年のエイズ予防指針改正に向けて提出されたパブリックコメントでは, 同指針に「感染リスクが高まってい

著者連絡先: 宮田りりい (〒530-0027 大阪市北区堂山町 11-2 堂山よしビル 4F MASH 大阪)

2019 年 11 月 11 日受付; 2020 年 9 月 4 日受理

るトランスジェンダーについても記載すべき」との意見があった。これに対し、厚生労働省は「『MSM』は、本人の性自認に関わりなく男性間で性的接触を行う方全般を意味する語として使用しています」と回答し、男性とセックスする（戸籍上の性別が）男のトランスジェンダーをMSMに割り当てるという立場を明確にしている<sup>5)</sup>。

しかしながら、MSMを対象とする従来の介入において、主なクライアントとして想定されているのはゲイ向けの商業施設やメディアを利用するゲイ男性である。たとえば、MSMを対象とする全国調査を実施した金子ら<sup>6)</sup>は、バイセクシュアル（両性愛）男性およびその他の性指向の方が、ゲイ男性より調査時点までの検査受検経験が低いという分析結果の背景として、MSMのセクシュアルヘルスに係る情報がゲイ向けのメディアに多く掲載されていることから、バイセクシュアル男性はこれらを自身向けの資料とは思わず、接触機会が少ない可能性がある」と指摘している。このことを踏まえれば、自分をゲイ男性と同一視していないトランスジェンダーもまた、MSMを対象とする介入から周縁化されている可能性がある。

## 2. 先行研究とリサーチ・クエスチョン

日本では、トランスジェンダーに対するHIV/AIDS予防啓発が、ほとんど重要視されてこなかった。ただし、これまでトランスジェンダーの存在がまったく取り上げられてこなかったというわけでもない。以下では、エイズ対策研究におけるトランスジェンダーに係る先行研究を整理した上で、本稿のリサーチ・クエスチョンを設定する。

まず、最も初期の調査研究としてあげられるのが、ニューハーフのセックスワーカーを主な対象に、質問紙調査(N=43)および半構造化面接調査(N=37)を実施した東ら<sup>7)</sup>による研究である。そこでは、ハイリスクな状況に置かれていると思われる調査対象者たちが、HIV予防やケアに関する情報などにアクセスしていない実態や、当事者コミュニティとのネットワークの希薄さがうかがえると指摘されている。また、トランスジェンダーに焦点化したものではないが、保健所のHIV抗体検査受検者を対象に質問紙調査を実施した塩野ら<sup>8)</sup>による研究では、有効回答者(N=13,006)のうち23人が「その他」の性別を選択し、そのうち8人がセックスワーク経験を有することが明らかとなっている。なお、海外の報告<sup>9)</sup>では、トランスジェンダー内のセックスワーク従事率の高さについて、スティグマによって当事者たちが就業の機会を奪われ、それ以外の仕事に就くことが困難になるためだと指摘されている。

他方、ハイリスクな状況に置かれているトランスジェンダーが、上記のようなセックスワーカーに限らないことを示す研究も存在する。たとえば、自分のことを「ゲイ」と認め、また趣味で女装する男性への聞き取り調査を実施

した新ヶ江<sup>10)</sup>は、その男性が女装した人が集まる集会に参加することや、その集会で行われるハイリスクな性行為について記述している。また、ゲイ向け出会い系アプリ利用層を対象にアンケートを実施した大槻ら<sup>11)</sup>は、全問回答者(N=6,921)のうち、トランスジェンダーであると答えた83名の回答を分析した結果、一定数のトランスジェンダーがゲイ・バイセクシュアル男性との出会いの場を利用しており、男性との性的接触に活発である人がいると推察される一方、HIV/AIDSを身近には感じていない傾向が強く、予防や治療の知識・情報も浸透していない可能性がある」と指摘している。

以上の研究では、トランスジェンダー内における、ハイリスクな状況に置かれている人々の存在が明らかにされてきた。だが、性別越境とハイリスクな状況とが、いっただいどう関連するのかを解明するという課題は、いまだ残されたままとなっている。そこで、本稿ではトランスジェンダーの中でもハイリスクな状況に置かれていると考えられる、ハッテン場利用経験のある女装者（主として、男性としての日常生活とパートタイムの女装生活という二重生活を送る人）を調査の対象に、性別越境を伴う性行動やHIV感染症に対する意識について明らかにしていく。

## 方 法

### 1. ライフヒストリー（生活史法）

本稿では、分析のための方法論として、ライフヒストリー（生活史法）を採用する。プラマー<sup>12)</sup>を参照すれば、ライフヒストリーの特徴として次の4点をあげることができる。1点目は、「個人の主観的な現実」への注目である。すなわち、研究対象者たちが、自らの生活や自らを取り巻く世界をどのような仕方で解釈しているのに関心が向けられる。2点目は、「過程、多義性、変化」の発見である。すなわち、調査対象者たちの生活経験の中に、秩序や合理性、一貫性を見出すことは優先されず、むしろ混乱や多義性、矛盾を当然のものとして捉え、それらの発見にこそ関心が向けられる。3点目は、「全体を見渡す視座」である。すなわち、調査対象者たちの生活経験を、身近な社会集団や歴史などとの関係性から切り離れた部分的（または個人的）なものとしてではなく、それらとの関係性も含めた全体的なものとして把握することに関心が向けられる。4点目は、「歴史を捉える用具」である。すなわち、調査対象者たちの生活経験の過程を、歴史的变化との関係性に焦点を当てながら捉えることに関心が向けられる。

このように、ライフヒストリーは調査対象者たちの生活史をその内部世界から、またそこでの混乱や多義性、矛盾を排除せずに、総体的かつ継時的に捉えることを可能とする。したがって、この方法論は社会との相互作用を通した

自己形成過程やそこでの葛藤を描き出す研究に用いられており（たとえば、多賀<sup>13)</sup>や宮田<sup>14)</sup>）、性のあり方が経時的に変化したり葛藤に直面したりする可能性を孕む本稿の問いを明らかにする上でも有効であるといえよう。

## 2. 調査対象者とインタビュー方法

本研究の調査対象者は、ハッテン場利用経験のある女装者2名（表1）であった。調査対象者の選定には、MSMのためのコミュニティセンターを運営するMASH大阪と協働した。そして、彼らのソーシャル・ネットワークを活用し、スノーボールサンプリング形式を採用した<sup>注3)</sup>。

調査時期は、いずれも2018年後半。調査回数は、1人あたり1回（所要時間は100～145分）。調査場所は、いずれも調査対象者の自宅だった。なお、調査対象者には、謝礼として3千円分のクオカードを手渡した。

## 結 果

### 1. Aの生活史

#### 1-1. ゲイ男性として生きようと決意した頃

Aは、幼稚園の頃から男の子が好きで、やがて「見た目は男性で生まれてきたけども、心は女性」だと考えるようになった。10代後半には、ニューハーフのショーパブで働き、その店のママに勧められて女性ホルモンの投与もはじめたという。だが、3カ月ほど働きながら踊りを練習し、いよいよ表ステージに出てショーを披露できる頃になると、以下のような将来への不安感を抱くようになった。

A：（女性）ホルモンしちゃって、延々とそれを続けて、胸も出だして、そしたら「自分は一生この、ニューハーフとして生きていかなあかんのじゃないかな？」っていう、不安感があったの。【中略】で、自分が表ステージに出る前

に、「自分はもう、ホルモンもいろいろやめて、ふつうに男の子として、ゲイ男性として生きよう」という決意をした。

このように、Aは不可逆的な身体変容を伴い、ニューハーフとして生きる将来に不安感を覚えるようになった。その後、仕事を転々とした後に、10代後半から20代後半にかけて、ウリ専でセックスワーカーとして働くようになった。また、当時Aはハッテン場として知られるゲイ向けの商業施設を頻繁に利用しており、そこでHIV/AIDS予防に関する情報に触れていたかもしれないという。ただし、そうした情報には関心を向けなかった一方、「死ぬ病気」という怖いイメージだけは漠然と抱いており、一度もHIV抗体検査を受けなかった。だが、ウリ専の仕事を辞めたころ、ふとこれまでの性行為を振り返ってHIV感染が気になったことから、不眠や情緒不安定のために通っていたメンタルクリニックの医師に頼んで、血液検査を受けたという。以下は、当時についての調査者とAとの会話である。

I（調査者、以下\*\*）：（HIV感染が）分かったら、「怖い」って思ってたわけじゃん？

A：思ってた。

\*\*：それでも（HIVの検査に）いこうと思ったのは、何かきっかけとかあったのかしら？

A：症状はなかった。なかったし、ふつうに気兼ねなく言ったな、先生に。「自分ちょっと男と（セックス）やりすぎてから、HIVの検査してくださいよ」っていったら、お医者さんが（検査してくれた）。

このように、予防に関する情報に触れていたかもしれないものの、それに関心を向けなかったことから、Aの怖いという疾病観は変わらず、受検が遅れたと考えられる。そ

表1 調査対象者のプロフィール一覧

名前 (仮名)	プロフィール
A	1980年代前半生まれ。年齢は30代後半（調査時）、独身の女装者。10代から20代にかけては、美容室やゲイバー、ショーパブ、ウリ専（男性従業員が男性客に性的サービスを提供する性風俗店）などで働いた。だが、ウリ専で働いていた20代後半には、しだいに客が減り生活費を稼ぐことが難しくなったことから、生活保護を受けるようになった。また、その頃これまでの性行為が気になり検査を受けた結果、HIV陽性だと分かった。HIV治療をはじめた頃は、精神的に不安定で、睡眠薬の大量服薬などを繰り返した。だが、30代に入ると、親身になって接してくれた医師との出会いを契機に回復し、職業訓練を経て施設職員として働くようになった。
B	1970年代前半生まれ。年齢は40代後半（調査時）、独身の女装者。中学生の頃、家族が勤めていた会社が倒産し、「早く働き手としてお金を稼ぎたい」と思ったことなどから、高校卒業後はすぐに就職し、現在も同じ会社に勤続中。30代半ば頃、偶然拾ったドレスを自宅に持ち帰ったことなどが契機となり、自宅で女装をはじめようになった。40代に入ると、ハッテン場として知られる公園などに女装姿で頻繁に出かけるようになった。現在は、ハッテン場として知られる商業施設を中心に、女装者や女装者愛好男性との交流を楽しんでいる。なお、HIV抗体検査は、これまで1度も受検したことがない。

の後、検査で HIV 陽性と判明した A は、これが契機となり、ゲイ向けの出会い掲示板を通して不快な思いをするようになった。たとえば、自身が HIV 陽性であると明かしてセックスする相手を募集したところ、心なく冷やかす内容のメッセージが届いたり、直接会った相手から、HIV/AIDS について質問攻めを受けたりした。ただし、こうした不快な思いをしつつも、A はセックスする相手探しを諦めるまでには至らなかった。以下では、女装生活を送るようになってからの、A の性行動について確認していく。

### 1-2. 女装生活を送るようになった頃

A は、30 代に入ると、それまでよりもゲイの出会い系サイトを利用して相手を探すことが難しく思うようになった。そこで、新たな出会いの可能性を女装に見出し、ニューハーフヘルス（ニューハーフ専門の性風俗店）で働くようになった。だが、その頃、女装姿での外出時に他人から「オカマ」と言われ嫌な思いをしたことなどから、その仕事を辞めてからは女装系出会い掲示板で女装者愛好男性を探し、女装姿で相手を自宅に招き入れ、セックスが終われば相手を帰して男の姿に戻るということを繰り返すようになった。

ところで、A は特定のパートナーとの固定的な関係性を求めているが、その理由について以下のように語っている。

A：パートナー、ノンケのパートナーでもそうやけど、「欲しい」って思わないのは、その、女装（姿）で出会ったら、女装（姿）でずっとおらなあかんやんか。【中略】それがもう面倒くさいし、「パートナーもういいや」って思ってる。で、「（セックス）やりたいなって思うときに（相手を）呼ばばいい」って思ってる、誰かね。（出会い掲示板に）載せるイコール、ね、（セックス）やったことある人の連絡先、LINE を知ってたらそこに連絡する。それだけで、もう満足。

こうして、特定のパートナーとの固定的な関係性を求めない A は、即物的に性的欲求を満たすためのツールとして女装系出会い掲示板などを頻繁に利用し、女装者愛好男性との性行為を楽しんでいたのである。

次項からは、A の生活史を軸にするかたちで、B の生活史についても確認しながら、両者の生活史を比較していく。

## 2. 生活史の比較

### 2-1. 性別越境を伴う性行動の変化

A の生活史からは、性別越境を伴う性行動の変化が明らかとなった。この変化は、B の生活史の中にも見出すことができた。以下では、両者の生活史における性別越境を伴う性行動の変化を、性行為相手の変化と出会いの場の変化という、2つの観点から整理していく。

まずは、性行為相手の変化に注目する。A の事例では、

セックスする際に女装するようになると、主な性行為相手がゲイ男性から女装者愛好男性へと変化していった。同様に B の場合も、女装をはじめると、主な性行為相手がノンケ女性から女装者愛好男性へと変化していった。なお、B はこの背景として、中学生の頃から「女の子になってやられたい（責められたい）願望」があり、それゆえ女装姿では「（相手は）男の人」という意識があったと言う。女装して外出するようになった頃について、B は以下のように語っている。

B：（女装してる時）声をかけられることに快感を覚えて、1人目会ったおっちゃんにフェラされて、2人目会ったおっちゃんにフェラさせられる、3人目会ったおっちゃんに（ペニスを）お尻に入れられて…って感じで、もう1カ月の間にエロいことほぼ済ますみたい（感じだった）。

こうして、女装者愛好男性たちとの出会いが生まれると同時に、B は彼らと頻繁にセックスするようになった。なお、当時 B は、ハッテン場で何が起るかわからなかったため、ローションやコンドームを携帯しておらず、また性行為相手がローションやコンドームを携帯していないことも多かったため、当時はそれらをほとんど使用せずに、フェラやアナル、逆アナルをしていたという。

次に、性行為相手と出会う場の変化に注目する。A の事例では、性別越境を伴い性行為相手と出会う場が、ハッテン場やウリ専、ゲイ向け出会いサイトなどから、ニューハーフヘルスや女装系出会いサイトへと変化していた。これと同様に B の場合も、ノンケ男性として生活していた頃は、一般的な性風俗店やノンケ向けの出会いサイトを利用して性行為相手と出会っていたが、女装して外出するようになると、女装系のハッテン場として知られる公園や商業施設、女装系出会い掲示板を通して、性行為相手と出会うようになった。

### 2-2. HIV 感染症に対する意識

A は、10 代の頃から男性との活発な性行動を取っており、HIV 感染が気になるようになってからも、怖いという疾病観から 20 代後半まで HIV 検査を受検していなかった。たとえば、大阪地域の商業施設を利用する MSM を対象とした塩野ら<sup>15)</sup>による質問紙調査 ( $N=1,354$ ) では、生涯受検経験がない回答者 ( $n=648$ ) の「これまでに HIV 検査を受けなかった理由」を年齢層別に分析した結果、20~29 歳層は「感染している可能性がない」と回答する人の割合が 30~39 歳層について低かったものの、「結果を知るのが怖いから」と回答する人の割合が 40~49 歳層について高かった。

A の事例やこの調査結果は、たとえ HIV 感染症を身近なものとして意識していたとしても、HIV 感染症に対するステイグマが強固であったり、気になれば検査を受ける規範

意識を備えていなかったりすれば、受検行動にはうまく結びつかないことを示唆している。

他方、Bの生活史からは、HIV感染症に対する楽観的な態度を見出すことができた。以下は、当時についての調査者とBとの会話である。

\*\*：(女装はじめた頃は) HIV/AIDSとか性感染症とか、そういうのは気になったりしなかった？

B：ああ、気にはしてたけど、気にするよりも、多分その、行為(フェラチオやアナルセックス)に対する興味のほうが強くて…。【中略】

\*\*：ゴム(コンドーム)とかローションを使おうとは、あんまり(考えなかった)？

B：あの、「絶対使おう」というわけじゃなくて、その、相手の人が持っていたら使うみたいなの。

\*\*：結構、相手の人(コンドーム)持っていたりしました？

B：いや、半々ぐらいかな。

こうした楽観的な態度の背景として、そもそも女装コミュニティでは、HIV感染症に関することがほとんど話題にならず、身近な問題として意識されにくい状況があると考えられる。Bは、このような状況について以下のように語っている。

B：実際、(HIV感染症に関する問題が)あるのに言わないだけなのか、それとも、ホンマにみんな、そういう(ことに関する)経験がないから喋らないのかが、よく分からないね。でも、ほぼ100%っていいぐらい、そんな話(周りから)聞かへんからね。

ところで、Aの生活史からは、上記のような事例を見出すことができなかった。その理由として、かつてAはゲイ向け商業施設に出入りしてHIV感染症に関する知識・情報に触れていたことに加え、自分をゲイ男性と同定してHIV感染症を身近な問題だと意識していたからだと思われる。ただし、その後Aは、性別越境を伴いゲイ向け商業施設から離れるようになった。さらに、自分をゲイ男性と同定しなくなったため、MSMを対象とする介入が届きにくい状況へと置かれている可能性がある。

## まとめと考察

ここまで、ハッテン場利用経験のある女装者2名を調査の対象に、性別越境を伴う性行動やHIV感染症に対する意識について明らかにしてきた。その結果得られた主な知見は、以下の2点にまとめることができる。

1つは、性別越境を伴う性行動の変化である。調査対象者たちは、性別越境を伴って主な性行為相手だけでなく、性行為相手との出会いの場も変化していた。

もう1つは、性別越境を伴いよりいっそう高まる、HIV感染症への脆弱性である。調査対象者たちは、活発な性行

動をとっていたにもかかわらず、HIV感染症に対するスティグマや楽観視などから、HIV検査を身近なものとして意識していなかった。加えて、HIV感染症に対する身近なものとしての意識は、ゲイ向け商業施設との関わりや、自分をゲイ男性と同定するか否かの影響を受けている可能性があった。

ここからは、前述の知見を踏まえて、従来の介入の限界および有効な介入手法について考察する。すでに述べたとおり、MSMに割り当てられるトランスジェンダーは、従来の介入から周縁化されてきた。それゆえ、当該層の中にもHIV感染症に対して脆弱な人々が存在するにもかかわらず、当事者たちのHIV/AIDS予防に係る知識・情報は乏しく、また検査へのアクセスも不十分な状況が維持・再生産されている。これらの課題に対し、以下ではMSMを対象とする従来の介入の内側と外側、それぞれの水準に分けて解決方策を考えていく。

まず、従来の介入の内側については、トランスジェンダーに配慮するための工夫があげられる。たとえば、文化人類学者の砂川<sup>16)</sup>は、新宿2丁目をゲイ・コミュニティとして捉える一方、ゲイの関係性とは違う、あるいは同じゲイでも違うネットワークや立場の視点からすれば、まったく異なる姿に見えるだろうと指摘している。本稿の事例を振り返ると、Bには従来の介入においてゲイ向けとしてとらえられる傾向のあったハッテン場が、女装系のハッテン場としてとらえられていた。これらを踏まえれば、今後は特定の空間に対する「ゲイ向け」といった意味づけによって、その空間を利用するトランスジェンダーを周縁化してしまう可能性に注意しながら、当該集団向けの情報をそこに関連づける工夫<sup>註4)</sup>が求められる。

次に、従来の介入の外側については、出会いや交流を求めて女装者たちが利用する女装系商業施設への介入があげられる。HIV感染症に対する身近なものとしての意識が、ゲイ向け商業施設との関わりや自分をゲイ男性と同定するか否かの影響を受けているのであれば、それはゲイ向けの商業施設やメディアを通してHIV/AIDS予防啓発を続けてきた、従来の介入の成果としてとらえることができる。このことを踏まえれば、女装者たちにもHIV感染症を身近なものとして意識してもらうためには、女装者向けの商業施設やメディアに向けた新たな介入が必要となる。なお、大阪地域にある複数の女装系商業施設でフィールドワークを実施した宮田<sup>17)</sup>は、当該施設が「大阪の3大ゲイタウン」として知られる堂山・ミナミ・新世界およびその近辺に集中する傾向があると指摘している。すなわち、新たな介入と言っても、ゲイタウンの中に設置されたコミュニティセンターを拠点にして、既存の資源を活用できれば、男性との活発な性行動をとる女装者たちに向けた介入を無理なく

進められる可能性がある。

## 結 語

最後に、本研究の限界および、今後の展望について述べる。本研究は、調査対象者2名の事例にもとづいているため、そこで得られた知見をただちに一般化することはできない。ただし、それぞれの事例は、MSMに割り当てられるトランスジェンダーが置かれている実態を解明する、貴重なデータである。今後は、ここで示した介入手法の有効性を検証するべく、従来の介入と連携するかたちで、女装者のセクシュアルヘルス増進に向けた取り組みを進めることが求められている。

## 注

- 1) トランスジェンダーは、かつてトランスヴェスタイト(パートタイムで異性装する人)やトランスセクシュアル(不可逆的な外科的処置を必要とする人)とは区別され、これらの中間という狭義の意味合いで用いられることもあった<sup>18)</sup>。だが、現在では「従来の性別概念の枠からはずれたもの全てを包み込む、包括的用語<sup>19)</sup>」といった広義の意味合いで用いられることが一般化しており、本論文においても広義の意味合いで用いている。
- 2) 「心身の性」という考え方は、「人の心と身体は別のものである」という心身二元論と、「人の性別は男または女である」という性別二元論とに基づいている。だが、こうした二元論を当然視する態度に対しては、すでに多くの論者から批判的議論が展開されている(たとえば、蔦森<sup>20)</sup>、中村<sup>21)</sup>)。
- 3) インタビュー方法は、事前にガイドとしてある程度質問項目を用意しつつ、文脈に応じて柔軟な形で進めていく半構造化面接法を採用した。また、インタビュー音声は、対象者の同意を得た上でICレコーダーに録音し、そのデータは筆者がすべて文字化した上で、事例としてまとめていった。調査に対する同意の手順は、次のとおりだった。まず、調査対象者に対し、本研究の目的や意義、倫理面での配慮などについて文書を用いて説明した。次に、理解が得られた場合は、研究協力承諾書に署名してもらい、承諾書の提出をもって同意とみなした。なお、本研究は、大阪青山大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(申請課題名:ゲイ男性向け商業施設を利用する女装者のセクシュアルヘルスに関する社会学的研究)。
- 4) このような工夫の例として、コミュニティセンターでの検査イベントの説明においてトランスジェンダーも利用できることを明記したり<sup>22)</sup>、トランスジェンダー

の人権について考える団体TRAnSと協働で冊子を作成したり<sup>23)</sup>といった、MASH大阪による取り組みがあげられる。

## 謝辞

本研究は、平成30~31年度厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業「MSMに対する有効なHIV検査提供とハイリスク層への介入方法の開発に関する研究」(研究代表者:金子典代)の一環として、さらに、平成30~令和2年度厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策政策研究推進事業の一環である、公益財団法人エイズ予防財団による「若手研究者育成活用事業」を受けて実施した。

利益相反:開示すべき利益相反はない。

## 文 献

- 1) Baral SD, Poteat T, Strömdahl S, Wirtz AL, Guadamuz TE, Beyrer C: Worldwide burden of HIV in transgender women: a systematic review and meta-analysis. *Lancet Infect Dis* 13: 214-222, 2013.
- 2) WHO: Consolidated guidelines on HIV prevention, diagnosis, treatment and care for key populations. [http://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/128048/9789241507431\\_eng.pdf?sequence=1&isAllowed=y](http://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/128048/9789241507431_eng.pdf?sequence=1&isAllowed=y)
- 3) WHO: Transgender people and HIV. [http://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/179517/WHO\\_HIV\\_2015.17\\_eng.pdf?sequence=1&isAllowed=y](http://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/179517/WHO_HIV_2015.17_eng.pdf?sequence=1&isAllowed=y)
- 4) 東優子: トランスジェンダー概念と脱病理化をめぐる動向. *こころの科学* 189: 66-72, 2016.
- 5) 厚生労働省健康局結核感染症課: 「後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針の全部を改正する件(案)」に対する意見募集に対して寄せられた御意見について. <http://search.e-gov.go.jp/servlet/PcmFileDownload?seqNo=0000168924>
- 6) 金子典代, 塩野徳史, 本間隆之, 岩橋恒太, 健山正男, 市川誠一: 地方都市在住のMSM (Men who have sex with men) における調査時点までと過去1年のHIV検査経験と関連要因. *日本エイズ学会誌* 21: 34-44, 2019.
- 7) 厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策研究事業「個別施策層(とくに性風俗に係る人々・移住労働者)のHIV感染予防対策とその介入効果の評価に関する研究」班(研究代表者: 東優子): 平成22年度総括・分担研究報告書. 2011.
- 8) 厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策研究事業「MSMのHIV感染対策の企画, 実施, 評価の体制整備に関する研究」(研究代表者: 市川誠一): 平成25年度総括・

- 分担研究報告書. 2014.
- 9) Winter S : Lost in transition : transgender people, rights and HIV vulnerability in the Asia-pacific region. United Nations Development Programme. [http://www.undp.org/content/dam/undp/library/hiv/aids/UNDP\\_HIV\\_Transgender\\_report\\_Lost\\_in\\_Transition\\_May\\_2012.pdf](http://www.undp.org/content/dam/undp/library/hiv/aids/UNDP_HIV_Transgender_report_Lost_in_Transition_May_2012.pdf)
- 10) 新ヶ江章友：日本の「ゲイ」とエイズ—コミュニティ・国家・アイデンティティー. 青弓社, 2013.
- 11) 大槻知子, 生島嗣, 三輪岳史, 池上千寿子, 樽井正義：ゲイ向け GPS 機能付き出会い系アプリを利用するトランスジェンダーの性の健康に関する調査. *GID (性同一性障害) 学会雑誌* 11 : 91-95, 2018.
- 12) Plummer K : Documents of life : an introduction to the problems and literature of a humanistic method. George Allen & Unwin. 1983. (原田勝弘監訳：生活記録 (ライフドキュメント) の社会学—方法としての生活史研究案内—. 光生館, 1991.)
- 13) 多賀太：男性のジェンダー形成. 東洋館出版社, 2001.
- 14) 宮田りりい：性別越境を伴う生活史におけるジェンダー/セクシュアリティに関する意識. *教育社会学研究* 100 : 305-324, 2017.
- 15) 厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業「男性同性間の HIV 感染対策とその介入効果に関する研究」(研究代表者：市川誠一)：平成 21 年度総括・分担研究報告書. 2010.
- 16) 砂川秀樹：新宿二丁目の文化人類学—ゲイ・コミュニティから都市をまなざす—. 太郎次郎社エディタス, 2015.
- 17) 宮田りりい：「二重生活」はどう意味づけられているか—女装者によるナラティブを事例に—. *解放社会学研究* 31 : 82-97, 2017.
- 18) 三橋順子：トランスジェンダー論—文化人類学の視点から. *クィア・スタディーズ*. '97 : 120-140. 七つ森書館, 1997.
- 19) 針間克己：性別違和・性別不合へ—性同一性障害から何が変わったか—. 緑風出版, 2019.
- 20) 蔦森樹：男でもなく女でもなく—新時代のアンドロジナスたちへ—. 勁草書房, 1993.
- 21) 中村美亜：心に性別はあるのか?—. 性同一性障害のよりよい理解とケアのために—. 医療文化社, 2005.
- 22) 後藤大輔, 宮田りりい, 伴仲昭彦, 町登志雄, 塩野徳史：さまざまなニーズに応える場所—敷居が低いコミュニティセンターの活用. (LGBT のひろば—ゲイの出会い編), 日本評論社, pp88-94, 2020.
- 23) MASH大阪：Community Center Dista 編：I Am Here. 2019 年度厚生労働省委託事業「同性愛者等向けコミュニティセンターを活用した広報一式」. 2020.

## A Case Study for HIV/AIDS Prevention to Transgender People in Japan Who Assigned to MSM (Men Who Have Sex with Men)

—Based on Two Cases of Male Cross-Dressers Who Have Used the Cruising Spot—

Lily MIYATA<sup>1)</sup>, Satoshi SHIONO<sup>2)</sup> and Noriyo KANEKO<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> Japan Foundation for AIDS Prevention, <sup>2)</sup> Faculty of Health Science, Osaka Aoyama University,

<sup>3)</sup> School of Nursing, Nagoya City University

**Objective** : The purpose of this study is to clarify sexual behavior and consciousness about HIV infection with gender transitioning of male cross-dresser who have experience using commercial venues known as cruising spot. Then we will show the limits of conventional intervention and the knowledge which contribute to the establishment of effective intervention methods for them.

**Method** : The method of analysis was life history method. And we collaborated with MASH Osaka that operates a community center for MSM in selecting the interviewee. And the method of interview was semi-structured interview.

**Results** : First, with gender transitioning, interviewees were not only changed the main sexual partners, but also changed the places where they met that partners. Second, interviewees were not familiar to HIV testing despite their active sexual behavior. In addition, familiarity to HIV infections might have been influenced by the using of commercial venues for gay men and the identity as gay men.

**Conclusion** : Interviewees are in high-risk situation by marginalized from conventional intervention. It is required to promote HIV/AIDS prevention in cooperation with conventional intervention for male cross-dressers who have active sexual activity.

**Key words** : MSM (Men who have sex with men), transgender, HIV/AIDS prevention